

# 夫婦共に元気に

## 「その日」まで

## 今日を楽ししく

菅克成さんは木山下町地区の区長として、地震当時は木山校区会長として地域の復興を見てきました。酒を嗜み、川柳を詠み、地域活動に勤しむ毎日。妻の治子さんと仲睦まじく「今」を謳歌しています。

かん かつ なり  
**菅 克成**

木山下町区長



### 2世帯住宅が全壊して 仮設住宅に入りました

4月14日の前震のときはえらいガタガタ縦揺れが来て、ガラス張りの台所の屋根に2階の瓦がどんどん落ちてきて、とてもじゃない状態だったわけですね。その寸前まではそこで晩酌しよったわけですけどね。私たち夫婦は息子夫婦と2世帯住宅に住んどったんですが、赤紙を貼られて全壊判定に。でもみんな無事だったのは幸いでした。

自宅は役場の近くなので行ってみようとしたら、途中、コンクリートかなんかが倒れとって。迂回して役場に行きました。明かりを求めて皆さんが集まりよったけんですね。明かりがあるということで、気持ちも大きくなるし。駐車場には大勢の人がおって、職員の人から毛布ばもろ

長さんから「次の」区長になってもらえんとか。名前だけでよかけん」って言われて。だまされたごたるふうで区長になってしまいました。それから14年、次ん人の決まらんけん、まだ区長はしよります（笑）。

町の体育協会で役員したこともありますが、役員してよかったと思うとは、顔見知りの増えたことですね。町の人から「あなたが（あなたの）おかげ」って言われるつとがうれしかけん、続けられたと思います。

地区活動は町からの補助金と、古紙や空き缶を回収した資金で運営しております。新型コロナウイルス感染症が広がる前は毎年、年末に忘年会を開いて親睦を深めました。消防団の飲み会にもよう行きよったです。

乾杯の発声前に

ひと滴

たことを覚えとります。

家には家財道具を残したままでしたから離れられんで、16日の本震のときは自宅前のアパートの駐車場に車を駐めて寝とりました。その後、夜は結婚した娘2人の家に身を寄せ、昼は自宅の片付けをする日々。そうしたふうでしばらくはバタバタとしていましたが、仮設住宅に入ってから少し落ち着きましたね。

新婚のように

卓袱台出す仮設

新婚の頃に住んどった北九州の若松は4畳半と台所3畳だけの狭い部屋で、仮設に入ってその頃を思い出して川柳を詠みました。仮設住宅は、

顔見知りが3世帯並んだ長屋。そこ

にいとこが見舞いに来たので一緒に酒を飲んだんですが、飲むほどに酔うほどに声も太う（大きく）なって。仮設の壁は薄かですよ。隣の人から壁ばコンコンてされて、「菅さん、もうようはなかな（もういいですよ）」て注意されました（笑）。迷惑かけて申し訳なかつたな。

### なんだかんで区長を14年 「あたがおかげ」がうれしい

34歳のとき、益城町で「菅工務店」を開業して34年間、大工ばしよりました。店を閉めてからは古閑萬風先生の川柳教室に毎月通いました。

私たちがいるのは木山下町区というところですが、ある日、当時の区

## PROFILE

1940年、美里町生まれ。74年に益城町で「菅工務店」開業、2008年閉店。木山下町区長を14年間務める。地震発生時は木山校区会長。川柳や畑仕事が趣味。



地震の年は木山校区の会長ばしよりました。地震直後は、誰がどこに避難されとらすか（していらっしやるか）把握が難しくって往生しました。あの頃はガラケーでも持つとればよかほうだったからですね。「だっとかさ（誰々さん）という区長さんはどこにおらすどか（いますか）」て聞かれて、避難所を探し回ったこともありました。ようよう見つけ出したばってん、昼は避難所におんなさらんで（いらっしやらなくて）、夜、体育館に戻ってご夫婦で寝とらすところに肩ば叩いて起こしました。なんの用事だったか覚えとらんですが、疲れとるところに気の毒なこつばしました。

あの頃は、なんば（何を）したらよかか分からん状態でした。例えるなら学校の先生から「分かりましたか」と聞かれても、なんが分かったかが分からん。あの感じですよ。ただ、バタバタした割には事故が起

メッセ熊本しかなかし、御船や菊陽と比ぶと取り残されとるように見える。人がもつと集まって来て新聞に載るごたる大きくてにぎやかな行事のあつとよかなと思えます。

下町地区はもともと人が減ってきよって、地震後はさらに減りました。限界集落の2歩手前ていつたところどころか。区長ば引きつけた頃は90近くあつた家が、今はもう60ぐらい。戸数が増えることは望めんでもんね。もうとにかく人がおらんことにか、なんもでけんごたる感じ。民生委員がおらん地区も増えてきよる。区長のいない区はまだなかです。が、今後のことを考えると、私もそろそろ次の区長ば見つけにやいかんと思つとります。

**長生きは幸か不幸か分からんばつてん妻と一緒これからも**

ある年の父の日に詠んだ川柳です。

こらんだつたし、トラブルちゅうのはなかつたですね。

支援物資は食べもんからトイレットペーパーからなんでもあつたけど、遠慮してもらう人もおれば、「よかなら、もういっちょ（いいなら、もう一つ）」と言わす人もおつて。そぎゃんとは（そういうのは）人間の性格次第だけどね（笑）。足りる範囲ならよかたいて言うて。文句言われたことはなかです。ね。「大変ですね」て声ばかりてもろて。下町の人とはほほ顔見知りだけんですね。

### 同じ場所に自宅を再建 晩酌ができる日常に

仮設住宅に1年半おつて、自宅を再建しました。2世帯住宅にはせず、息子が建てた家の隣に平屋を建てました。まだ仮設におるとき、菊陽に住む友人から「こっちゃん（こっちゃんの町）来んね」て誘われましたが、

父の日に

嬢ぢやうに手向けた白い旗

毎年6月の父の日は、前月の母の日と比べると、子どもたちの思いに差があるように感じられますね。

父の日は

母の日負けを自覚する

妻の治子は中学のときの同級生です。23歳で結婚、2014年が金婚式でした。平穏な日をいつまで続けられるとでしょうか。地震の前年に妻が言った言葉を詠みました。

75歳にて想う

いつか来る

必ず訪れる「わかれ」

ひとり残るのも

先に逝くのも嫌という

長生きも幸か不幸か思案中

区長ばしとるけん、益城を出ていこうとは思わんかつたですね。

再建した家では気兼ねなく晩酌もでくるごつ（できるように）なって、狭いながらも楽しいわが家って感じ。ただ、今考えると、お客さんが来ても泊めることがでけんもんで、2階建てにしようとけばですね。急ぎすぎたかなという反省はあつてすたいね。

### 夜市や花火復活はうれしい 大きな行事もあつとよかな

県道沿いは昔は繁華街で、店がずら〜と並んどつたんです。でも今は歯槽膿漏のうろうで歯の抜けたごたる感じで、店もまばら。まちつと（もう少し）にぎやかさが欲しかなあと思いますが、夜市や祭り、花火が復活したとはほんによかつた。昔の地藏祭りば思い出します。ただ、熊本市に隣接しとるばつてん、町にはグラン

長生きは幸か不幸か。いつか来る「その日」を思うと、答えは難しかです。85歳の今も思案中です。

長女・長男・次女にそれぞれ子がいて孫が10人。孫にも子が生まれて、ひ孫が5人おります。家族には恵まれました。「人生100年時代」といわれるけん、あと15年。夫婦共に元気で、今日を楽しく、畑仕事で汗ばかいて、できれば、いつまでん（いつまでも）晩酌のできる体でありたかもんです。



人が集まる場所を

またつくりたくて

自宅兼店舗を再建

長く続けた文具店の移転オープンを翌日に控えてのまさかの被災。自宅も店舗も全壊で一体どうなるのか…。多くの選択に迫られる北川さんが店舗再建を決めたきっかけとは。



### 前震の直前に 移転工事を完了

私が営む東文堂は1989（平成元）年に開業しました。当時は今の役場の道向かいにあって、いろいろ考えて自宅の敷地内に移転することにしたんです。敷地には私の家と80歳（当時）の母の家がありました。長男と長女は自立していたので、2階建ての自宅の1階を改装して店舗にしよう。最後のシャッター工事も終わり、業者さんから「コンクリートが乾いていないから翌朝開けてください」と言われて鍵を受け取ったのが、2016年4月14日の午後7時頃でした。

### 自宅と母の家は 前震でもうだめ

鍵を受け取り、シャワーを浴びて



### 店に残った文具を 避難所で無償配布

益城中央小の避難所で過ごしていたときのことです。「仕事はもうできない」と思っていて、店を再開する気持ちは全く消えていました。そんな中、走り回っている役員職員の皆さんの傍らに必ず文具があるのに気が付きました。ペンや鉛筆だったり掲示用のホワイトボードだったり。「ああ、こういう状況でも文具があるんだな」と感じました。

「店に使えるものが残ってた」と思い出し、取り出してきた文具を「汚れているけど使えますか」といながら役場や学校、幼稚園などで無償で配りました。すると次第に「こういう物を注文したいんだけど」という声を頂くようになって。こんなときに仕事していいのかなと

いるときに前震が起きました。浴室が2階にあるので「風呂場が下に落ちた」と思いました。シャワーヘッドで頭を打ったり転んだり。一瞬、気を失っていたんでしょう。何が起きたのか分からない中、「家におるとね」という母やご近所の声が聞こえて、壊れた玄関から何とか外に出ました。自宅も店舗も母の家もその

時点で「ああ…もうだめだな」と思うほど大きな被害で。母は素早く逃げ出してけがはありませんでした。歩いて役場に行くと、ものすごい人だかりでびっくり。着るものもない、毛布もないと言われ、透明のレインコートを着て朝まで過ごしました。そこからの記憶が飛び飛びであり覚えていません。たぶん友達がお

にぎりを持ってきてくれて、分け合ったような気もするけど…、その一日二日のことは正直記憶がないんです。あ、そうだ、15日に長女が住む菊陽町のマンションに母と一緒に避難しましたね。

その深夜に本震が発生。6階だったから横揺れがすごくて。建物内にいるのが不安だったから、数日間、公園の駐車場などで車中泊しました。その後、「働く婦人の家」やテナント村を転々とし、益城中央小学校の避難所に落ち着きました。応急仮設住宅が完成すると、母は木山仮設団地へ。私は子どもたちの帰省を考慮して光の森のみなし仮設住宅に住み始めました。

## PROFILE

1960年、益城町生まれ。文具を扱う東文堂店主。  
90年に夫が亡くなり店を1人で引き継ぐ。子どもは  
長男と長女の2人。現在は母と2人暮らし。



思う半面、困っておられるなら、と注文を受け始めました。店の固定電話も携帯電話に転送するようにしていたので、出先で注文を受けるような形。東文堂の第二のスタートでした。2016年の夏頃だったと思います。

### 「周りに背中押され 「笑店街」に入居

みなし仮設に移った後しばらくして、熊本市東区にある親戚の会社の敷地でプレハブを借りて仕事を再開しました。事務所に置く机やいすはメーカーさんが無償で提供してくれて。みんなが大変と分かっているから、利益なんかいらぬという気持ちで注文を受けていました。仕事していると安心するというか、「元に戻ったみたいで落ち着くんですね。誰かが誰かのためになっていけばいい、それで自分も元に戻るなら

ですよ。正直「安心した」と「怖い」の両方がありました。建てたはいいけど、店を続けていけるかどうか。そんな不安は、自営業をやっている以上どうしても付きまといます。鍵で店の開け閉めをすると今でも時折、前震前のことを思い出しますね。

### 「たまり場となる 商店でありたい

私は今65歳。店を始めた頃は、仕事は60歳までかなと考えていたけど、時代の流れとともにまだやれると思うようになりました。あと3年：いえ、5年を目標に頑張りたいと思います。ただ肉体的な衰えは隠せず、重い物の配達などは人の助けを借りています。

これから先、できるだけ自分でやっていくためにも今は筋肉を落とさないよう、週3回ほどのトレニ

そう思う部分はありました。

全壊した店と家の再建については随分悩みましたね。父も主人も亡くなって、子どもたちも独立した。仕事場と家を切り離して災害公営住宅に入った方がいいんじゃないか。年齢を考えると、あと20年はやれるかな。もしここでやめてしまったら。仕事は再開していましたが、いつまでもプレハブでは続けられません。

そんなとき、県道沿いの仮設商店街「いくばい益城笑店街」への入居のお誘いがありました。仕入れが発生するし、商品を置く棚も揃えなくてはいいけません。でも周囲から「買物する所がないけん、店は開いてよ」と言われて。「そうだよな：よし頑張ろう」と決心し、2017年の年明けに笑店街に入居。そこで3年ほど営業していました。

ングやプールに行ったりして自己管理をしています。そして、そこで知り合った仲間さんたちと楽しい時間を過ごしたりもしています。

同居する母は91歳だけどパワフル全開！娘の私が言うのも変ですが、マイナス10歳でいけるほど元気で何事にも前向きです。地震後の住まいの本山仮設で知り合った方の送迎もあり、今でも仲間です。体操したりお出かけしたりして楽しそうです。私もみなし仮設住まいのときの隣人と今も仲良くしています。地震がなかったら出会わなかった人たち：運命的につながった人たちです。

先日のこと、「おばちゃん！久しぶりです」って言いながら入ってきた紳士的なお客さんがいました。「小学生の頃、毎日来てたよ」って。あの頃はコンビニなどもなく、うちみたいな小さな商店はいい意味でのたまり場でしたね。開店から36年。

### 「自宅と店舗を再建 勇気はあったけど

店と自宅の再建に当たり、2軒別々だった家をどうするかが問題でしたが、1軒にまとめて店舗付き住宅にしました。今は母と二人暮らし。店舗はやめて外販だけにしようかとも思いました。でもやっぱり人が集まる場所をつくりたかった。よそに移るといふ選択肢はなかったですね。

再建費用はグループ補助金を活用して残りはローン。75歳までローンを抱えるのは勇気がいりましたが、東文堂を開いた翌年に主人が亡くなってから、ここまで文具店を続けてきた経験と自信があります。

今の東文堂がオープンしたのは2019（令和元）年。最初に東文堂が開店したのが平成元年だったから、再開も「元年」にしたかったん

あの頃の小学生が大人になって子どもさんを連れて来てくれるのは本当にうれしいですね。お店を続けてきて良かったと心から思える瞬間でもあります。

小売業が厳しい世の中、お店での文具販売をどうしていくのが今の最大の課題です。益城町がこれからもっともつと便利で楽しく住みやすい町になってほしいし、私もその中の一員でいたいから、たとえお店の形態が変わっても気軽に立ち寄ってもらえる町の商店であり続けたいですね。



# 町の役に立ちたい

## 地震で気付いた

## 地元愛

熊本地震で被災したのは、高校1年生のとき。  
そこから大学進学、結婚、出産、育児と  
益城町でライフイベントを重ねていきました。  
高校時代に参加した地域活性化の活動を通じて  
思い描くようになった町での将来のビジョンとは。



「できることをしよう」  
その思いで、乗り越えた

熊本地震が起こったとき、私は高校1年生でした。前震のときは宮園地区にあった自宅にいたのですが、家の中がぐちゃぐちゃになって、まるで洗濯機みたいにかき回されて。電気・ガス・水道とすべて止まったので、両親と3人で車中泊で過ごしました（弟は偶然、骨折で熊本市内の病院に入院していました）。翌朝には余震が続くなか、阿蘇郡高森町にある母の実家に避難したのですが、その夜に本震が発生。南阿蘇地域も被害が大きく、「とりあえず家に帰ろう。帰れなくなったら大変」と、唯一通行できたグリーンロードを通過して益城まで戻ってきました。

当日のことはあんまり覚えていないのですが、ショックだったのか食かしたいとはずっと思っていました。高校の先生が「益城町未来トーク」というプロジェクトのチラシを見せてくれたのは、夏休み明けのことです。若い年代を対象に「益城町の復興のために、自分たちのできることを話し合う」をテーマにしたワークショップが開催されると知り、私は「行きます」と即答。もともと私は、学級委員や体育祭の実行委員に手を上げるなど、率先してすぐ動くタイプです。ずっと「何かしたい」という思いを持ち続けていたこともあって、同じ益城町出身のクラスメイトと一緒に参加を決めました。

ワークショップに参加して、率直に楽しかったです。みんな益城のことを思っているし、「こんな考え方もあるんだ」というのを知ること



いう思いで動き続けていました。

**参加を即決したプロジェクトで  
気付いた町の魅力**

欲がなくて、帰りの車で母に差し出されたリンゴを泣きながら食べたことを覚えています。でも、私よりも母の方が怖がっていて、「大丈夫だよ」と言っていてあげたりもしていました。

それから約1カ月間は、近くの幼稚園で避難所生活。友達もたくさんいて、みんなで助け合いながら暮らしていたので、意外に気持ちは落ち着いていたと思います。自衛隊の方から「大丈夫だよ」と声をかけていただけて安心できたので、気持ちも沈み込むこともなかったですね。

余震が続く中、学校が再開するまでは、日中は家に帰って掃除をするなど、ずっと積極的に活動していました。「できることをしないと」と

高校が再開したのは、地震から約1カ月後。熊本市内の高校に通っていて、まだクラスメイトの顔も覚えていないタイミングだったので

が、益城町在住ということで周りからは心配されました。でも、ライフラインが復旧して自宅に戻っていたこともあり、それ以後はわりと普通に学校生活を送っていました。とはいえ、例えば木山川のあたりなど、町の景色が被災によって様変わりしているのを見るたびに「ひどいな」とつらい気持ちになっていましたし、地震からの復興のために何

## PROFILE

2000年、益城町生まれ。高校1年生のときに熊本地震で被災。高校生のときに「益城町未来トーク」に参加、さまざまな活動に従事。尚綱大学卒業後に結婚。2児のママ。



ができたし、これから益城町がどうなっていくんだろうなって楽しみに感じました。

それまでも「益城ってあいさつしてくれる人が多い、いい町だな」とずっと思っていたのですが、町への意識がより高まりました。

### 「何かしたい」思いを行動に移し続けた

「益城町未来トーク」は月1回程度の活動で、私は高校の3年間、参加し続けました。グループごとに話し合っって企画を実行していく活動内容で、みんな仲がよかったから、和気あいあいとサークルみたいな雰囲気、率直に楽しかったです。

私たちが担当したのは商品開発。益城町の特産品を使った魅力的なジェラート作りに取り組みました。町の特産品が何かから自分たちで調べて、町内の企業に協力いただい

ませんでした。これから10年後も益城に住み続けたいと思います。ます。やっぱり居心地がいいですし、欲しいものは十分そろっています。「益城町未来トーク」の活動を通して益城町のことをもっと好きになったという理由があります。役場の方や保健福祉センターの方は優しい方ばかりですし、子どもを外で遊ばせていても安全だと思われ、児童館とか遊ぶところもいっぱいあるから、子育てがしやすい町だとも感じています。一番行くのは総合体育館と図書館。「潮井自然公園」や「カタル」、空港にも飛行機を見に行きます。「木山城趾」は一番好きな景色です。とはいえず、普通に生活していても、やっぱり地震のことは頭の片隅にあります。他地域の地震のニュースを見ると、かつての自分たちと同じような大変な思いをしているであ

て製造してもらい、商品名を考えてパッケージのイラストも自分たちで描き、販売のためのマーケティング戦略も練って、2017年に開催した「MASSHIFES」(マッシュフェス)で実際に販売しました。加えて、劇作家の平田オリザさんを招いた町の未来についてのパネルディスカッションで一緒にお話ししたり、益城町のPRマルシェイベントに参加したり、いろんな社会人の方との交流もできて、本当にたくさん経験をしました。

高校では部活動にも入らず、この「益城町未来トーク」の活動に熱中していました。

また、地震の経験を生かして、高校に「防災委員」を立ち上げました。防災委員長として関西や東北など先陣地に研修に行つて高校にフィードバックするなどの活動にも取り組みました。これも、「何かしたい」「で

ろう現地の方は大丈夫かな、と心配になることも。地震の情報には今でも敏感です。やっぱり、また地震が起こったら怖いですから。小さい子どもを抱えているということもあって、不安というよりは警戒心を持ち続けています。

一方で、被災の跡が残っていた町の景色も少しずつ変わっていて、県道の4車線化工事が完了したら「復興した」と実感できるのかな、と思います。

でも、町や道路がきれいになっても、熊本地震があったことは忘れられないようにしないとけないと思います。そして、もしかまた大変なことが起こったとしても、子どもたちにはみんなと助け合い、協力して過ごしてほしいですね。

今は専業主婦として子どもと家族中心の生活ですが、子育てが少し落ち着いたら、町のために何かできた

きることをしたい」という思いから起こした行動です。

いろんな活動を通して、益城町の魅力がよりはっきりと見えてきました。人の良さもそうだし、熊本市からの距離の近さや、地震からの復興で街並みや道路が整備されてきている点も魅力だと思います。

熊本地震をきっかけに町を出てしまった友人もたくさんいるので、もっとたくさんの人に住んでほしいとも思うようになりました。

### これまでも、これからも益城町で幸せに生きる

高校卒業後は尚綱大学へ進学しました。卒業後すぐに結婚・出産し、今は益城町で2児の母に。生まれてから小・中・高校、大学進学、結婚、出産、育児と、ずっと益城町で過ごしてきました。

地震からの10年間、益城から離れ

ら、とも考えています。

地域おこし協力隊のように町の活性化につながるような活動にも興味がありますし、「益城町未来トーク」で開催していたフェスをまた復活させたい。まずは仕事に復帰するときには、益城町内で働く。このことが、町への貢献にもつながると思っています。

そして何より、この益城町で幸せな家庭を築いていく。それが、今、私が抱く一番の目標です。



# 子どもたちの

# 力になりたい！

# 地震で芽生えた思い

中学2年生のときに被災した後藤壮梧さん。  
 テント村からの通学、高校受験、  
 コロナ禍での大学進学の際には  
 たくさんの人たちの支えがありました。  
 社会人となった後藤さんが伝えたいことは。



## 散乱した家の中から 父が持ち出したもの

あの日のことは、今もはっきりと覚えています。僕は中学2年生になったばかりで、ちょうど1年生の3月に理科の授業で地震のことを勉強した直後だったんですよ。

その夜、風呂を上がってすぐに大きな揺れが襲ってきて。「壮梧っ！ 壮梧っ！」と叫ぶ父の音が震えてたな、っていうのは、今でも覚えています。あんな父の声は初めて聞きました。

僕たち家族が住んでいたのは2階建てのアパート。揺れが収まったから、家族それぞれが必要なものだけを取り出して、外に出ました。僕は勉強道具やサッカーのスパイク、ボール。父が真っ先に持ち出したのは毛布、そしてパソコンでし

た。「えっ…!? 食料とかじゃなく

て、なんでパソコンなんだ…」と思いましたが、ちゃんと理由がありました。

母は青春時代に自宅が火災に遭い、思い出の写真が焼けてしまい、父方の祖母も水害で家屋が被災し家族写真を無くしていたそう。そんな経験から父はパソコンに保存していた僕たち家族の写真を守らなきゃ、と思っただけなんです。あとから父に聞いたら、「何かあったらパソコンを持ち出そう」って前から決めてたそうです。

その夜からしばらく車中泊でしごきました。自宅のアパートは全壊。1番怖かったのは携帯電話の警戒アラートの音でした。アラートが鳴る

たび、僕と3つ下の弟はビクビクしてました。

## テント村で交わした約束

車中泊をしていた頃、父の両親が心配して大分から駆け付けてくれました。それまではずっと、自衛隊が炊いてくれたご飯だったりとか、メロンパンみたいなのを食べてたんですけど、祖父母が持ってきてくれた唐揚げがすごくおいしかったのを覚えてます。

それからは「益城町総合運動公園」に用意されたテント村での避難生活。地震以降、建物の中にいることに恐怖を感じていたのも、もちろん「家」とはほど遠いけど、でも僕

や弟にとってテントの中は安心できる場所でしたね。でも、テント村から学校に通いながら、これからどうなるんだろう…と日々不安でした。テント村では、支援で来てくれたいたアルピニストの野口健さんと一緒にテントを張ったり、ボールを蹴ったりして仲良くなりました。ロックバンド「レミオロメン」のヴォーカリストの藤巻亮太さんも来てくださって、いろんな話をしたり、サッカーをしたり。

そんな中、野口さんが「一緒に富士山に登ろう」と誘ってくれて、藤巻さんからも「ライブに招待するから来てね」という約束をもらっ

たんです。そしてその年の8月、野口さんと一緒に町の子どもたち30人ほどで富士山に登頂。僕にとっても初めての経験ですごく楽しくて、その時だけ

## PROFILE

2002年、益城町生まれ。大学卒業後、地元の銀行に入社。「カタリバ」のスタッフや、勉強を教えてくれた当時の大学生と現在も交流を育んでいる。両親と弟の4人家族。



地震のことを忘れることができず。また藤巻さんには同じ年の10月に、阿蘇のアスペクタで開催されたコンサートに招待していただきました。本当にありがたいし、みなさんいい人。家族の中で、未だに当時の頃の話をしませぬ。

### 気軽に相談できる 大人との出会い

8月後半に木山の仮設住宅に同居。テントやカーテンの布一枚で仕切られた避難所とは違って、ちゃんと壁がある、ドアがある。今考えれば狭いけど、「家」だなって思いました。

その頃、教育支援機関の「NPO法人カタリバ」の活動を知りました。被災地の学生たちの教育支援をしてくれる団体。

例年なら中学生の職場体験を町内で受け入れてもらっていたんです

「リバ」に通った大学生の友人が学習支援の団体を立ち上げたんです。僕もボランティアの一人として手を挙げて、益城中で放課後に中学生のために学習会を開いたり、定期テスト前に3日間ほどサポートをしたり。大学1年から4年まで続けました。これまで多くの人たちに支えられてきたように、僕も子どもたちの力になれることをしたかったです。

### 温かい心の人たちがいる そんな町の温度が伝わって

地震から5年後、木山神宮の向かいにワーキングスペース「Connect」を町が開設しました。町内外の人たちにちょっとした仕事や勉強ができるスペースとして貸し出したり、中高生たちが自由に集まれる場所として開放されました。

僕は、運営のアルバイトスタッフとして加わりました。そこで触れ合

が、地震の影響でそれが叶わず。「カタリバ」のスタッフの人たちが熊本市内での受け入れ先を探してくれたり、修学旅行先のサポートなどもしてくれました。

また、仮設住宅の集会所「みんなの家」で「益城夢創塾」が開かれ、スタッフや大学生の人たちに勉強を教えてもらいました。皆さんにはいつも親切に接してもらい、親よりも年が近い大人という存在からか、何でも相談できました。

### 今度は自分たちが 子どもたちの力に

仮設住宅で4年ほど暮らしました。その間、高校受験もあって。仮設住宅では集中して勉強できなかった。集会所や塾に行くなど別の場所でしたよね。

その後、両親は新居を建てました。町を出ることも考えたようでした。

う中高生たちに対して僕が大切にしていたのは関係性。例えば、大人や教師とのつながりが縦の関係で、友達が横の関係だとします。ならば僕たち大学生は、親や友達にも言えないことを聞いてあげられる斜めの関係になろうと。

中高生から進路のこととかは結構聞かれたりしましたね。大学生目線では分からないこともあるので、そういうのを話したりしました。自身でも学んだことは多くあります。やっぱり人に恵まれた。

地震から10年がたち、当時中学2年生だった僕は社会人になりました。振り返ると、僕に影響を与えてくれた人たちはいっぱいいます。約束を叶えてくれた野口健さんや藤巻亮太さん。「カタリバ」のスタッフや「Connect」を運営している方の存在も特に大きいですね。地震が起きなかつたら出会えなかった人

だが「お前たちはどうしたい」と意見を求められ、少し考えて「ここ（益城）がいい」と答えました。大変なことはいっぱいあったけど、友達もいたし、たとえば市内に出るっていうのは実感が湧かない。たぶん、自分の生きてる世界が狭かったというのもあったかもしれないけれど、でも益城町を離れるという選択肢はなかったですね。両親もその考えをすごい尊重してくれて。

辻の城の新居に入居したのは高校3年生のとき。その頃、世の中はコロナ禍で緊迫していました。翌春には大学受験を控えており、なんでも受験のときは大変な事態の中なんだと……

大学生になってからも、「カタリバ」のスタッフの人たちとはずっとつながっていました。けれどコロナ禍により「益城夢創塾」は閉鎖。それからしばらくして、一緒に「カタ

たちです。

いずれ僕も仕事の都合でこの町を離れることになるでしょうけど、多感な時期を見守ってくれた人たちと出会ったこの町はとても大切な所。何から話せばいいのかわからないぐらい、いろいろしてもらってきているので。地震前と街並みは変わったけれど、ここは自分を成長させてくれた場所で、温かい心を持った人たちがいてくれる。僕たちがそうだったように、次の世代の子どもたちにも伝わるといいなって思います。





コワーキングスペース「Connet」の  
スタッフとして働く5人。  
地震後、さまざまな場面で  
必要と感じたのが  
人と人とのつながりでした。  
大学生となった今、  
その経験が生かされています。

## 学生が町に期待する

## つながりと

## 意外な未来の風景

### 入田 星空

2005年、益城町生まれ。熊本マリスト学園高等学校を経て、  
25年に熊本保健科学大学入学。

### 後藤 隆梧

2005年、益城町生まれ。東稜高等学校を経て、  
24年に熊本学園大学入学。

### 坂田 萌美

2006年、益城町生まれ。第二高等学校を経て、  
24年に九州ルーテル学院大学入学。

### 野本 歌恵

2006年、益城町生まれ。熊本商業高等学校を経て、  
25年に熊本県立大学入学。

### 橋本 琉

2006年、益城町生まれ。第二高等学校を経て、  
25年に熊本県立大学入学。

### 座談会 「Connet」スタッフ

方でその後、被災をきっかけにいろいろな経験をさせてもらったことも思い出します。

車中泊でテント村に住んでいたんですけど、そこを作ってくれた野口健さんに会って、被災した僕ら子どもたちを富士山に連れて行ってくださいました。復興支援の取り組みで大阪に行ったことも。地震はつらかったけど、そうやっていろんな人と関わり、さまざまな場所に行けたことはよかったです。

**入田**.. ショックだった気持ちはもちろんありますが、多分みんなとちょっと違っていて。ちよつと不謹慎な言い方かもしれないんですけど..。小学4年生であまり事の大きさが分かっていたいなかったのもあるんですが、うれしく感じられたこともありました。

余震が怖くてお父さんとお母さんに挟まれて川の字になって寝たり、地震で仕事に行けなくなったお父さんと顔を合わせる時間が増えたり、おばあちゃんの家に避難したり。家族や親戚と過ごせる時間が増えたのが、素直によかったです。



写真左より 入田星空、橋本琉、野本歌恵、坂田萌美、後藤隆梧

熊本地震が起こったとき、みなさんは益城町内の小学生でした。地震直後はどう感じましたか？

**坂田**.. 地震直後はつらかったですね。ずっと水が来ないし、電気もつかなくて、ご飯もない。でも、地域で私が一番小さかったので、近所の人が一目散にうちに来てくれました。みんな協力して家の周りのがれきを片付けて避難することも。そんなつながりがなかったら逃げられなかった人もいたかもしれないので、地域の人、近所の人とのつながりは大切だなんて、子どもながらに思いました。

**野本**.. 私は避難所で何か犯罪が起きたりしなかが怖くて、そのあと1カ月くらい車中泊をし、知り合いがいる鹿児島や祖母の家などへ避難しました。眠れず悪夢にうなされることになって、小学生ながら体調を崩してしまい、すごくつらかったですね。小学6年生まで2年間くらいは悪夢を見続けました。

**後藤**.. 瓦の落ちる音や緊急地震速報の音が本当に嫌で、トラウマになっていましたね。一

ようやく自宅に戻れたとき、自分の家って安心するって感じました。久々の登校で友達と会えて、当たり前だったことがこんなにいいものなんだって気付かされました。

**橋本**.. 自分は、実は地震のときはあんまり覚えていなくて。小4だったというのもあるけど、地震後は大津町のいとこの家に行って避難していたので。だから、地震のときの益城町の記憶ってあんまりないですね。地震よりも、中学生時代のコロナ禍の方がつらかった記憶が大きいかもしれません。

2016年から今まで、印象に残っていることは？

**橋本**.. 僕は4歳から続けているサッカーを楽しんでいました。中学校からは部活動で先輩後輩ができるのも楽しかったです。だからコロナ禍がつかつた。外でサッカーしたりみんなとしゃべったりするのが好きなので、友達と会えなくなった時期が本当につらくて。中学校の修学旅行も一大イベントなのに、県

外に行けなかったのは残念でした。

**入田**…私もわりと地震のことは意識せず過ごしてきたと思います。中学校、高校では結構勉強を頑張つて、助産師になりたいという夢を持ち、大学では看護学科に進学しました。勉強は大変だけど、アルバイトを始めて行動範囲が広がり、今が一番楽しいです。

**野本**…商業高校に進学して、職業体験やボランティアにたくさん参加しました。益城町の「木山初市」もボランティアでお手伝いしたのですが、こんな風に地元を盛り上げる行事に参加したり、そこで見つけた課題を学びながら解決したいという思いが高まって、大学で地域づくりが学べる学科に進学しました。

**後藤**…僕は復興支援でいろんな場所に行かせていただいたのをきっかけに、岡山県の災害ボランティアや旅行にも行くように。現地の方とか人と話すのが好きだなと感じるようになりました。

**坂田**…地震の後は避難などの理由で益城町を出て行った人が多くて、友達と遊べなくなっ

利用していただいています。運営は一人社会人の方がいて、あとは大学生スタッフで行っています。

—— 中学・高校時代に「Connet」を利用していましたか？

**全員**…はい。(頷く)

**橋本**…大学受験の勉強ですね。利用しているときにスタッフと話しかけてくれるので、なんか雰囲気いいなと思ってました。

**入田**…中学時代のクラスメイトと久々に会うこともありました。橋本くんもそうです。高校が離れて疎遠になった同級生と話せたり、以前よりも仲良くなれた子もいて、すごくあったかくていい所だなって思っていました。

**後藤**…僕は兄がこのスタッフだったので勉強で使っていて、大学受験後に誘われてスタッフの面接を受けました。中学生のときに行った災害ボランティアで、現地の地域の人と話しながら楽しくできた思い出があって、「益城でも地域の人とつながれたらすごくい



たり地域のつながりがなくなっちゃうのが悲しかった。でも中学進学や家の再建のタイミングで戻ってきてくれたときは、めっちゃうれしかったですね。

教員の母の影響で教師を目指しているんですが、被災をきっかけに防災教育にも興味を持ったというか。日本って災害大国で、また大きい地震があると思うんですけど、どうやって子どもたちに伝えていくか、防災教育に力を入れたいと考えるようになりました。

—— 皆さんが働く「Connet」はどのような場所ですか？

**坂田**…仮設住宅団地内にあった集会所「みんなの家」を移築して、2021年からワーキングスペースとして開設されました。益城町には中学校までしかないの、高校に上がったらみんな町外に行っちゃうんです。高校生が集まる場所がないから、その居場所としての役目を持たせた場所です。中学生から高校生、大学生、社会人の方まで幅広い方に

「いだろうな」って志望した感じです。

—— ここで働くなかで、どういう学びがありますか？

**野本**…うれしいことが多いですね。高校生の利用者の子が外でも『Connet』の人ですよね」って声をかけてくれたりして。中高生とのつながりがいっぱいできるのが楽しいです。

**後藤**…イベントの企画運営もやっています。今年度は3回企画しました。10月には中高生が町内のお店とコラボして出店する参加型イベント「Connet青春フェスタ」を開催しました。

**橋本**…「青春フェスタ」では出店者同士の交流も生まれていて、イベントをすることによってつながりをつくれているのかなって感じるとうれしいですね。人と関わるのが好きなので、いろんな企画を考えたいです。

**野本**…友人と一緒に「Connet」内で子ども食堂を企画中です。地域のためでもある

けど、自分のために企画しているっていうのも大きいと思います。

**坂田**.. そうだね。自分のやりたいことをチャレンジできる場所でもあります。

**後藤**.. 近所の年配の方が、パソコンの使い方を聞きに来られることもありましたよ。

**入田**.. 「豆腐があるから取りに来んねー」って言うってくださるご近所さんも(笑)。

**野本**.. 会話していると、おじいちゃんおばあちゃんが可愛くて、こっちが癒やされます。

**後藤**.. 「Connet」に入るまでは地元の人と関わる機会もあまりありませんでした。でも、益城で働いてお世話してくれる大人の人と会うことが増えていくうち、「こんなに益城のために頑張っている人がいるんだ」と正直、意外に感じましたね。

**入田**.. いつも話している高校生の子が『帰りに気をつけてね』って言われるのがうれしい』って話してくれました。私もそう言われてうれしくて。最近、向こうから声をかけてくれることが増えました。「Connet」

**後藤**.. 今はスタッフと利用者が話す感じなので、大学生の利用者が増えることで、利用者さん同士で話して、いろんな意見が飛び交ったり、チャレンジや新たな輪が広がるような雰囲気になればと思います。

**入田**.. 普段会えないような大人の人と話せると、自分にはない刺激をもらえるんです。町外に出て行かなくても、益城町でいろんなつながりをつくれますよっていう場所。目指すところはそこにあるかなって感じています。

— 地震後も益城町に住み続ける中、「復興」はどう見えていますか？

**橋本**.. 通っていた中学校が、自分たちのところはプレハブ校舎だったのに、今はきれいな新校舎が完成しています。それを見ると、復興を感じるかな。うらやましくも感じますね。

**坂田**.. 4車線化工事が進んでいて、通る度にお道が変わっていきたり。地震直後は潰れた建物やブルーシートばかりでしたが、今はそれがなくなっています。家が建って、道がキレイにな



での関わりがなかったら、絶対になかったつながりだと思います。

— 今後、「Connet」をこうしていきたい、という目標はありますか？

**坂田**.. 「つながり」がテーマの場所なので、勉強スペースとしてはもちろん、大学生や社会人の方にも利用していただいて、いろんな交流の場になってほしい。学生さんが目指す職業の方が「Connet」を利用してくださっている社会人の中にいたら、そこで話ができる今後につなげられたりとか。勉強以外にも、いろんな交流の場になってほしいです。

**野本**.. 大学生の利用者を増やすために、先輩スタッフが「Connet」のホームページで、益城町に住んでいる県内各大学の学生のインタビュー企画を進めていて、私も参加しています。高校生にとって大学選びの参考にもできる情報を発信できればと思って、つながりを生かしながら取材を頑張っています。

り、人が帰ってきてきているのを見ると、復興は進んでいるなあって感じます。

**後藤**.. ささいなことなんですけど、道を歩いていたらおじいちゃんおばあちゃんが必ずと言っていいほど、あいさつしてくれるんです。めちゃくちゃいい町だと思っています。

**入田**.. 確かに、人のつながりはすごい感じる。それに、益城町は熊本市内みたいに都会すぎない。それでいて市内にも行きやすいじゃないですか。田んぼとか畑とか自然豊かな場所があって、人も温かくて落ち着くというのがある、この町のいいところ。復興で発展している雰囲気は感じるけど、この風景を壊されたくない。アットホームで自然に近い環境を保ってほしいなという気持ちもあります。

**野本**.. 大学卒業後も、できれば益城町には住み続けたい。家族がいるのももちろんなんですけど、益城町でのボランティアを通して、そういう地域行事をしたくなって思って進学先を決めたので、やっぱり益城町にはこれからも貢献していきたいなと思います。

# 「生きる力」

## 養う教育を

## 見つめ直した

「子どもたちのために」と  
受けた教育長の職。  
胸に秘めた教育への思いを  
復興のためにぶつけようとした矢先、  
思わぬ壁が立ちはだかりました。



さか い ひろ のり  
**酒井 博範**

元益城町教育長

### 校長退任後に被災 翌年、教育長に

私は37年間、教職生活を送りました。その間、母校木山中学校で8年、教育行政で12年、経験を積みました。2016年3月に益城中学校の校長を退任してからは嘉島町教育委員会に勤務。地震に遭ったのはそれから間もなくのことです。

前震は、バーンと下から突き上げられるような強い衝撃でした。自宅周辺の宮園地区はひどい状況で、家は全壊。家の片付けをし、翌朝は妻と両親を車に乗せて高森町へ。その日は温泉に入り、スーパーで買い物をして帰宅しました。

本震のときは自宅の敷地内で車中泊をしようとしたのですが、激しい横揺れに驚いて車から降り、町役場そばの公民館の駐車場に避難しました。には働けに出られないということ。経済的な困窮にあった子もいます。子どもたちがトラウマにならないように、力を抜く体操やカウンセリングなどを取り入れてもらいました。東日本大震災の被災地でこんなことが行われているかなどを学ぶようなことも含めて。やっぱり心の安定が一番です。

学校の給食は地震後しばらく、パンと牛乳の簡易給食でしたが、それが弁当に切り替わっていきました。そこで熊本市にお願ひし、東区の給食センターから配食してもらうことになりました。2017年4月からです。それから2年の月日をかけ、町の給食センターの建て替えに取り組んだんです。建設に当たっては寄付金などを使わせていただきました。

振り返ると、地震によって教育の

た。そこには100人ぐらい集まっていたと思います。そこで役場職員の方から段ボールや毛布をもらいました。

その後、私たち家族は妻の実家がある天草市に一時避難し、5月になって菊池市に一軒家の貸し家が見つかったので、家族で移りました。その間に自宅再建に動き、家は翌2017年に完成しました。その年の1月、私は前任の森永好誠先生から益城町教育長の職を引き継ぎました。

### 生きる力養う原点 考えさせられた

森永教育長は引き継ぎノートを残されていました。それを読んだと

き、震災直後の対応に大変苦慮されたことがよく分かりました。学校の一部は避難所となっていたため避難者との共存をどうするか、給食の調達は、通学路の安全確保は、授業の遅れは…。直面する課題への判断が求められ、町長の下、町の幹部職員と検討されたようです。

私が教育長を引き継いだとき、学校に避難されていた方は仮設住宅に移られ、授業も平準化してきていました。建物の解体が進められていましたが、倒れた家やつぶれた家、ロボロの道路などがそのままになっている所もあり、気分が悪くなった。保健室に行ったり、という子どもたちは多かったです。中には家がなくなった子もいますし、親がすぐ

## PROFILE

1956年、益城町生まれ。2016年3月に益城中校長退任後、嘉島町教育委員会勤務を経て、17年から25年まで益城町教育委員会教育長を務めた。



根本とか原点を揺さぶられたような気がしています。日頃の学びは形式的なものじゃ全然ダメだと。頭で分かっていたって、実際に何かが起こったときに何ができるか、どう動けるか。学力ももちろん大事だけど、危機回避とか生き延びる能力とかを身に付けるために、疑似体験などを通して本気で取り組まないと。「生きる力を養う」という原点を見つめ直すことになりました。

### コロナ禍でも 学びになることを

私は教育長に就任する前から、子どもたちのためにぜひともやりたいプランを胸に秘めていました。そこで震災対応が一段落したら教育改革をやろうと。就任3年目となった2020年度、いよいよ本格的にプランを実行に移す：はずでした。その行く手を阻んだのが新型コロナウ

イルス感染症でした。

地震被害からの復旧が進み、みんなの気持ちも前向きになって、「よし攻めの教育をしよう」と思っていた矢先に現れた未知のウイルス。外出自粛に学校の臨時休業。教育活動ができず中体連（中学校総合体育大会）は中止、PTA活動も停止。それまでの常識が覆された感で、正直言ってどうしたらいいのかわかりませんでした。子どもたちも本当に大変だったと思います。

私は現場の先生方にこう伝えました。「タブレット端末を使ったりモート（遠隔）授業でもいいし、プリントでもいい。分かりやすい教材を使って、何時間・授業何コマ分とかにはとらわれず、とにかく児童・生徒の学びになることをやってください」「児童・生徒が一人でも何をしていいのかわからない状況をつくり出さないようにしてください」と。

### 教育改革プラン いよいよ始動

新型コロナが感染症法上の5類になったとき、やっとコロナ禍が落ち着いたと思いましたが。2023年の後半から、コロナ禍前の教育活動に戻す取り組みを徐々に始めました。

その前年の22年度、私は「夢実現！ 小中連携を踏まえた教育イノベーションへの挑戦」をテーマとする教育改革プランに着手していました。その重点事項は、①地域とともに創る「コミュニティスクールの推進」②タブレット端末を使うのが楽しみになる「ICT教育の推進」③英語の授業が楽しみな「英語教育の推進」④授業を受けるのが楽しみになる「授業の創造」。これらに小・中学校の生徒と教員が連携して取り組むことでした。

①は既に、震災前から多くの地域

の皆さんが学校に来てくださっていました。たとえば益城中央小学校は年間1000人以上がテストの採点などに携わってくださっていて、震災後の避難所運営がとてもうまく

いったと聞いています。地域と学校が普段からつながっていることの大切さを改めて感じています。②は一部をコロナ禍で実現。③については私が英語教員だったこともあって、17年度に英語教育推進会議を立ち上げました。その後、自ら各学校を回って説明し、小中連携での実践に取り組みしました。

一方、コロナ禍の中で教員になった新卒の先生は、通常の授業が経験できず、また、研修の機会もほとんどありませんでした。そこで私は、それまでの教員育成の経験を生かそうと、山のようにあった教員研修や教育研究報告などの資料を後輩の教員育成のためにまとめたんです。そ

のまとめを活用して町内の小中連携の授業改革に取り組みしました。

### 震災に耐えた力が 頑張る力になる

教育長の任期は1期3年で、現在（2025年）は3期目の最後の年です。これまでを振り返ると、最初の3年間は震災対応、次の3年間でコロナ対応。最後の3年間で私がやりたかったこと、すなわち本格的な教育改革に取り組みことができました。

震災翌年からいち早く取り組んだ英語教育は、5年かかって小中連携が実現しました。たとえば、小学6年生が卒業するとき、「自分の夢」や「中学校で頑張りたいこと」を英語で語ります。それをリモートで中学校の英語教員が見て、コメントしてもらえようになりました。種を蒔くところまでできたかな。

益城町の子どもたちは、最大震度7の地震に2回も遭い、その後、コロナ禍という苦境も経験しました。

苦しい体験をすると、絶望的になって顔が上がらないし気も滅入りまです。ですが、そうした経験は必ず人生に生かせる時が来ると私は信じています。体験から学び、突破口を見つけてピンチを「チャンス」として捉え、「チャレンジ」して「チェンジ」する。震災に耐えた力は、頑張る力につながるはずで。私自身にそう言い聞かせながら、子どもたちにも、そして教育現場の先生方にそう思ってもらえたら幸いです。



# 師である父と

## 野菜を作りながら

### 益城の大地守りたい

農業に従事する父の背中を見て就農を決意した坂野勝則さん。夢に向かって歩み、そして叶え、「師」と共に野菜を作っています。胸に去来するもの、見据える先とは。



さかのり  
坂野勝則  
野菜農家

#### 被災後に立った畑で 継ぐことを決意

小っちゃいときから農業したいという思いはありましたが、なんかやってやろうというか、覚悟みたいな感じになったのは、地震がきっかけです。

当時、中学2年生で、学校が再開するまで畑について行って大根を収穫したり、作業場のお手伝いをしたりしました。被災して全体的に暗い雰囲気でしたけど、父も家族も「下は向くより、なんさま（とにかく）前ば見るぞ」という感じでした。仕事のこと家のことも、次のことを考えて段取り始めて。前に進もうとする父の背中が一番すごくてかっこよかった。それまではなんか軽い気持ちだったんですけど、自分も前に進めたというか、夢を決めることがで

きました。

4月14日の前震ではたいした被害はなくて。でも16日の本震は全く違いました。バキバキッと木々の折れる音がしたと思ったら、明治の終わり頃に建てられたという家の土壁が崩れ落ちました。家族全員で屋外に逃げたんですが、自宅や近所の屋根瓦があちこちから飛んできては割れて、すごい恐怖を感じました。

#### 自主避難で見た 大人のたくましさ

被災直後は、阿蘇熊本空港ホテルエミナースで2日ほど過ごし、JAかみましきの選果場内に借りていた作業場に家族で移りました。父の呼びかけで集まった近所の方20人ほど

と一緒に、しばらく軒下避難をすることに。作業場の蛍光灯が余震で揺れるたびに怖くなったけれど、レトルトのカレーとかカップラーメンとかあったかいものを食べたのが、めっちゃ安心しました。

作業場で2カ月ほど過ごした後、自宅の敷地内にある農業用倉庫を応急の仮住まいにするため、父が知り合いの大工さんに改装を依頼しました。仮設住宅への入居も考えたようですが、毎日の農作業で泥まみれになって帰るわけで、他の入居者への配慮もあったようです。

6月初めに応急の家ができること、わが家は自主避難に切り替えました。これを聞きつけた近所の農家さんたちが「そういう手があったか」

と、それぞれに応急の家の準備を始めました。しかしその頃は資材不足。倒壊した自分の家のドアやサッシを再利用された方もいたと聞きます。そんな大人たちのたくましさを間近で見せてもらいました。

#### 父に近づぐための 一歩を踏み出して

仮住まいから登校するようになり、部活動が始まると、普段の生活が戻ってきました。けど父にとって問題は山積みそのまま、特に深刻だったのは農業設備の被害。壊れた農機具の買い替え、崩れた畑の畦の修理、サツマイモ倉庫の建て直しなど。自宅再建より設備への投資が先だったようです。生活するためには、まず仕事に必要な機械がないことにはですね。

中学3年になった僕は高校受験

## PROFILE

2003年、益城町生まれ。熊本県立農業大学校を卒業後、父の則昭さんを師と仰ぎ就農。20ヘクタールの畑で大根、ジャガイモ、サツマイモを栽培。



で、迷わず熊本県立熊本農業高校を選びました。そして経験や知識をさらに深めたくて寮に入ることに。それから農業漬けの日々が始まると、やっとならに近づいたための一歩を踏み出せたような気がしました。

高校卒業後は県立農業大学校に進学。2年間、高校と同じく寮で暮らしました。家を離れて5年。家族が恋しくなるときも多々あったけど、僕なりに成長できた時間だったように思えます。高校・大学の友達とは今もいろんな意見交換をしたりしますね。高校の友人は農業する人もいれば全然違う職に就く人も多いんだけど、大学の友人はほとんどが農業関係の仕事をしてるんですよ。阿蘇だったり玉名だったり天草だったり。やっぱりこっちは全然違う環境で農業をしている友人たちと専門的な話ができるんで、そのつながりは大きいかな。

験があったからこそ、今の幸せを噛みしめることができているのかもかもしれません。町の道路や建物は復旧しているけれど、心の復興というのは、人それぞれに時間やタイミングが違うんじゃないかな。

わが家で言えば、被災直後の大根の発送用パッケージには「復興大根」の4文字を商品名にして、気持ちを震い立たせてきましたが、3年後には「感謝の気持ちを忘れず思いやりを育んだ大根です」のキャッチコピーに変えました。そこには、地震から心の復興が進んできたことが表れている気がします。

### 僕たちなりの復興の果たし方

僕が生まれ育った小谷地区は、昔は88軒もの農家があったそうです。地震前は十数軒ありましたが、現在は数軒しか残っていません。でも、

### 現場の難しさをひしひしと感じ

農大を卒業して家に戻り、父の仕事ぶりを間近で見ると、改めて「すごい」の一言でした。素早い判断と段取り。自分にはできないな、と。学校で学んだことはもちろん無駄ではないけれど、言われたことをひたすらやるだけだったので。自分なりに考えたことをかみ砕いて行動に移すにしても、この「思考」という工程を自分の中に落とし込むのが難しかったですね。

父は就農して数年後の23歳のときに祖父を亡くしています。だからなのか「お前の年頃るとき、俺にはもう親がおらんかった。だけん（だから）、現場に一緒におらるっ（いられる）ときに覚え込んで」とよく言われます。父と作業するたびに「一緒に農業できてよかった、すごくあ

同じ地区で就農した先輩や若手同士のつながりは強く、高齢で廃業された方々の畑を借り受けて作物を栽培しています。

益城町は、良質な火山灰の土壌をはじめとして農業にすぐ恵まれた土地です。この豊かな農地を守り次世代へつなげるのも、僕たちなりの復興の果たし方だと思っています。

そしてもう一つ。国内ではさまざまな場所で災害が頻発しています。熊本地震の翌年7月に発生した九州北部豪雨で、父たちは被害の大きかった福岡県朝倉市に応援に駆け付け、自分たちが経験した農業被害や立て直す方法を伝えたそうです。僕は毎日欠かさず農業日誌をつけているんですが、いつどこで起きるとも分からない災害や、天候不良による被害などにも役立てられればと思っています。

わが家では家族がどんなにワイワ

りがたい」って思いますね。偉大過ぎて、うん、自分は恵まれてるなって。父は目標で、いざれ超えたい存在。今も苦労かけてるっすけど、早く成長して恩返ししたいなっていうのはありますね。

就農して3年。今ではトラクターに乗っているときが一番落ち着くかな。いつもと変わらない景色の中で、農作業の段取りを考える時間が楽しいというか。自分なりに考えた段取りと、父がたまに言ってくれるアドバイスが一緒なんだと思えたときに、なんかちよっと父に近付けたかな、って思います。地震直後に父と畑に行き、農業を継ごうと決めた自分がこうして畑に立っていることにしみじみとします。

家族で食卓を囲むとき、ふと、地震で水が出ず、家もなく、温かいものが食べられなかったときのことか思い出されます。けれど、あんな経

イ騒いでいても、テレビから天気予報が流れるとシーンと静まりかえるんですよ。それが坂野家のルール。畑は生き物ですし、天気と付き合っていくかなくちゃいけないですからね。それはどの農家さんも同じ。それぞれの土地で生きていくために、そして僕はこの大地を守りながら、これからの生き抜いていきたいと思っています。



# 私らしさを

## 気付かせてくれた

### 友達のことば

5年前に最愛の夫を亡くした田口瞳さん。つらく悲しい出来事にも、周りの助けや持ち前の前向きさで気持ちを整えたそう。8人の子どもたちとたくましく生きる肝っ玉母さんの笑顔の奥にある思いを尋ねます。

たぐちひとみ  
田口瞳  
自営業

### 7人の子どもを 一人で連れて避難

地震からのこの10年間は、私たちが家族がいろんな試練を乗り越えてきた時間だった気がします。

益城町に家を構えたのは13年前。自衛官だった夫の赴任地へのアクセスと、空港や高速道路への利便性を考えての選択でした。家を建てた当時は長女・次女・三女・四女・長男の5人の子どもと私たち夫婦の7人家族。それから次男、五女が生まれ9人の大家族になりました。

4月14日に起きた前震のとき、大きな揺れに驚き、家中がパニックに。倒壊は免れましたが家の中はめちゃくちゃ。私は生まれて3カ月の五女を抱き上げ、夫は他の子どもたちの無事を確認し、誰にもケガがなかったことにまずはほっとしました。



自衛官の夫は緊急出動し、私は7人の子どもたちを連れて広安小学校に避難。五女を抱き、よちよち歩きだった次男はおんぶし、当時中学1年生だった長女が他の4人のきょうだいの手を引いて。翌日、避難所から一旦自宅に戻ると夫も一時帰宅し、夫は数日後に予定していたシートルでの研修の準備に追われました。

本震後も余震は続き、車の中に家族で避難しながらも、夫は「任務は変更できない」と渡米を敢行。福岡空港まで夫を見送ったその足で、私たちは佐賀県の友人宅にしばらく避難させてもらうことにしました。

### 8人目の出産を見届け 夫は闘病へ、そして…

普段の生活に戻れたのは、水道が回復し1カ月ほど経ったころ。ありがたいことに、大家族の私たちのために、ひと部屋を埋めるほどの支援助物を知り合いからいただきました。そのころから私は助けていたばかりでなく、人さまのお役に立ちたいと思うようになったんです。ある日、バランスボールのインストラクターの記事を目にしました。仕事内容には産後指導士や体力指導士も関連しており、7人も子どもを産んだ丈夫な身体の私ならば、こうした仕事を通じてお役に立てるかもしれないと。夫も背中を押してくれました。地震から半年後、私は必要な資格を取り、子育てと家事の合間を縫って活動を始めました。

地震から4年ほど経ったころ、私は8人目を妊娠。夫は三重県駐屯地に単身赴任となり、それからしばらくして健康診断で夫にガンの疑いが指摘されたんです。熊本で再検査を受けるも同じ診断でした。

臨月を迎えていた私のために夫は「出産に立ち会ってから手術を受ける」と言っており、末娘の六女が生まれるのを見届けて入院しました。術後、退院し一時は部隊に戻れたのですが、ガンの転移が見つかった。「家族のために必ず治す」と、再手術と治療に耐えながら1年10カ月の闘病の末、2021年4月16日、夫は帰らぬ人となりました。

家族は必ず元気になると信じ続け、これが悪夢なら覚めてほしいと願ったのですが…。

結婚したのは今から24年前、夫が21歳、私が22歳のとき。優しい夫で、

## PROFILE

1978年、熊本県生まれ。エステティシャン、産後・体力指導士。2001年に晴一さんと結婚。21年4月16日晴一さん永眠。現在9人家族。



子煩悩な父親で、みんなパパが大好きでした。コロナ禍での闘病中は面会もままならず、子どもたちにはパパが元気でいた頃の面影しか残っていません。ただそのことが慰めにもなりました。

### 大丈夫、きつと大丈夫

夫が逝ってしまった後、8人の子どもたちを抱えどうやって生きていく…と正直、途方に暮れました。悲しむ間もなく、膨大な死後手続きにも追われて。戸惑う私を、友人たちが何から何まで補ってくれたんです。頼れる人たちがいてくれるありがたさ。一人で頑張らず、できないことは助けてもらおう。重くのしかかっていた不安が次第に、前向きな意識へと変わっていきました。

私が悲しんでいたら夫が悲しむ。私が不安でいたら、子どもたちは

へは行かず、ママのサポートをする」と言い出して。父親を失ったことからの、わが家の家計を考えてのことだったでしょう。助産師を目指すための進学だからと、何度も説き伏せたけれど決心は固く。

そうやって長女に夢を諦めさせたことが申し訳なくて。ずっと心苦しく思う中、だったら私が夢を抱き子どもたちと叶えていたら、大人になっても夢は実現できることを伝えられたら、と考えるようになりました。それからは渡辺直美さんと叶えたい夢の一つ一つを書き出し、ビジョンボードに貼り付けていきました。すると長女が私には内緒で、あるテレビ番組に応募。それは、応募者の中から選ばれた人の夢を叶えてくれるというものでした。

そして2025年の夏、家族全員をニューヨークに招待いただき、憧れの渡辺直美さんとタイムズスクエ

もつと不安になる。子どもたちの前で悲しむのはもうやめよう。これまでのように明るい私でいよう。笑顔でいよう。大丈夫、きつと大丈夫、と。

それまでの私は、インストラクターの資格は持っていたものの、仕事と呼べるものではありませんでした。けれど8人の子どもたちを養っていかないといけない。子どもたちが病気になったら誰が看る？ 幼稚園の送り迎えや学校の行事は？ 何かあったらすぐに飛んでいけるのか。そんな不安はあったけど、エステティシャンの試験も受けていた私は、化粧品メーカーのシェアサロンでフリーランスとして働き始めました。そのスペースを使って、人さまのお役に立ちたいと思って始めたバランスポールのインストラクターの仕事も行うようになりました。

アでダンスを踊るといふ夢を実現させてくれたんです。子どもたちが私の夢を叶えてくれました。

### 「明るいあなたに元気をもらえる」

毎年、4月16日になると熊本地震のことがメディアで取り上げられます。私たち家族にとつてその日は「パパの命日」でもあります。

あれから町の復興が進むように、私たちも悲しみを少しずつ乗り越えてきました。夫が亡くなってからずっと子どもたちには「パパの姿は見えないけど、パパからはみんなのことが見えていて、いつも守ってくれているよ」と話してきました。近頃は「いざというとき、パパは誰を一番に助けるんだろうね。9人もいるから大変だよ」と、みんなで笑い合えるようになりました。

この先、つらい出来事に遭遇した

### 子どもたちと叶えた夢

家庭と仕事の両立に慣れるのは大変でしたが、子どもたちがいたから頑張った気がします。もう一人、私が元気づけられたのが、ニューヨークと日本を行き来し活躍するタレントの渡辺直美さんの存在。地震のときも夫が亡くなった後も、彼女のSNSからポジティブな投稿を見て力をもらっていたんです。私は一つの夢を持つことにしました。それは「いつか渡辺直美さんと一緒に踊りたい」という夢。実はそれには訳があつたんです。

現在22歳の長女は、幼いころからきょうだいたちの出産に夫と立ち会ってきました。そのことがきっかけで、助産師になるのが夢でした。夫が亡くなったとき、長女は高校3年生になったばかりでしたが「大学

としても、下を向くより前を向いて歩いていきたい。地震からこれまで本当にいろいろと大変なことがありました。けれど、多くの方々に助けられ、支えられて今があります。これからは恩返しをしたいと思って。

友達がなんでこんなによくしてくれるんだろうって思っていたら、「明るいあなたを見てみると、元気をもらえる」って言うてくれて。だから、明るいキャラを貫き通して、自分自身を元気づけていくつもりです。そして、女性を元気にしたい。お母さんが元気だと家がすごく明るいし、子どもが元気になるから。

